

望郷の歌

望郷の歌は、私が忘れられない映画の題名の一つである。

小学校高等科を卒業したばかりの十五、六才の頃、平沢小学校で、活動写真（映画）会があつた、無声映画である。

弁士一人で大きな声を張りあげ、男の声、女の声、泣き声、笑い声、熱弁である。時々蓄音器をかけ、流行歌を流す。その時かけていたナツメロの一つに（裏町人生）があつた。

望郷の歌のストーリーは、多感な年頃の私の心をとらえ、忘れ得ず、鮮明に思い出される。ナツメロの裏町人生は、私の十八番になつた。私が生まれて始めて見る純情悲恋物語だつた。

田舎の片隅に生きる、相愛の若い二人がいた。純粹で美しい交際であつた。終着は結婚である。だが旧弊があつた、男の方は貧しい家庭の青年であり、女の方は資産家の女性である。二人は愛を確かめ合い、女性の両親に結婚の許しを求め、二人して両手をつき、幸せにします、幸せになりますと懇願した。

だが父親から、釣り合はぬは不縁のもと、娘は絶対嫁にはやれぬと、間接的に貧乏人のくせにと罵られ、悲嘆にくれて帰つていく。

次の日の夜、二人は田圃の片隅で落ち合った。月が綺麗な夜だつた。男は「十年待つてくれ必ず釣り合はないと言われない人間になつて帰つてくる」と誓い、そして二人は愛を確かめ合い、身も心も初めて一つになつた。

男は北海道の炭坑で、一心不乱に働き一銭たりとも無駄にせず貯蓄した。実直な青年だつたから思いを寄せる女性があつたが、誓いあつた女性との結婚を夢見て脇見せず、味気ない殺風

景な炭坑の宿舎で頑張った。

そして五年、六年と過ぎてゆく。一方の誓い合った女性は十ヶ月後、男の子を産んでいた。子供が一年生になっても、その子の父、誓い合った男性から何の連絡がない。子供を可愛がってくれる青年がいた、情にほだされ結婚してしまう。

炭坑で一心不乱七年も働き、貯蓄も資産家並になった。一度故郷に帰り彼女に会って貯蓄した全財産を渡し、あと三年待つてくれるよう言うつもりで帰郷してくる。

田舎に帰って彼女は結婚して子供もいるのを知り、悲嘆にくれ号泣する。七年も連絡しなかった自分が悪かったと思い直し、近くの路上で自分の子供とは露知らず、母の名を聞きお母さんに渡すのだよと言い、ランドセルに全財産を入れる。

「俺は若いのだ、好いてくれる女性が居るんだ」と炭坑に帰って行く。

約束を破った彼女は、子供のランドセルに入っている大金に驚き、子供にどうしたのと聞く。「知らないおじさんが、お母さんに渡すのだよと貰ったの」と言う。「どんなおじさん」と聞く。子供の話を聞くうちに、その人はこの子の実の父、堅い約束をしたあの人だと気づき、心は千々に乱れ泣き伏してしまう。

そんなストーリーだった、何処にもある男の純情悲恋ものフィックションであるが、多感な年頃だったし、私は人一倍涙もろい、映画を見たとき深い感銘を受けたのだろう。

それから六十年以上も過ぎているのに、「望郷の歌」、「裏町人生」が忘れられない。